四天王寺高等学校新聞
第二号
取材日
平成30年1月22日
関西のトップ情報満載!!

広がる文化のちから
～関西元気文化圏賞～

「十秒の壁」を超え東京五輪へ

「文化」とは学問や道徳・芸術などを通じて、人々の心に感動を与えるものである。日本には地域それぞれが誇りを持った文化がある。広く人々がその魅力を知ることによって地域を活性化させるカが文化にはある。その活動の一環として「関西元気文化圏」という取り組みがある。

「関西元気文化圏」とは関西に溢れる文化の力で日本の社会を魅力あるものにし、元気に明るくすることを目指す活動のことである。

あらゆる分野において東京に一極集中するのを解消し、地域の文化を振り起こす目的で元・文化庁長官である河合隼雄さんの呼び掛けにより二〇〇三年六月、関西二府四県の経済団体や報道機関などの代表者五〇名で発足した。その後福井県・三重県・徳島県・鳥取県も加わり、企業・団体の代表者は現在一〇六名となっている。

▽関西元気の日

毎年十一月に関西元気文化圏の地域内にある美術館や博物館などの文化施設の入館料を無料とする「関西元気の日」という事業も行っている。平成二十九年度の期間中の総入館者数は過去最多となる五十三万人にものぼった。

今回贈呈式を取材させて頂いた「関西元気文化圏賞」は毎年その一年で関西から日本を元気づけることに貢献した人・団体に贈られる賞である。最も活躍し貢献した人には「大賞」を、大賞に準ずる「特別賞」、将来性が期待できる人には「ニューパワー賞」がそれぞれ贈られ、十五回目となる今年は六名の個人・団体に贈られた。

今回「大賞」を受賞したのは滋賀県出身である陸上選手の桐生祥秀さんだった。

桐生選手は二〇一七年九月に福井県で開催された「第八十六回日本学生陸上競技対校選手権大会」の一〇〇メートル決勝で九秒九八を記録した。このタイムは十九年ぶりに日本記録を更新し長年越えられなかった「十秒の壁」を見事うち破った。

近年日本では男子陸上競技への関心が高まっており、二〇一六年に行われたリオデジャネイロオリンピックでは四×一〇〇メートルリレーで銀メダルを獲得し、多田修平選手がニ〇一七年に一〇〇メートルで十秒〇七を記録したりと陸上競技界は大いに盛り上がっている。そんな中ら九秒代を記録した桐生選手の活躍は関西から多くの人を明るく元気にした。

京都国立博物館の降矢哲男さん

京博120周年

京都国立博物館は一八九七年に開館し、昨年一二〇周年を迎えた。開館一二〇周年とそれを記念して開催された特別展覧会「国宝」で関西から日本文化の奥深さを改めて示した功績などから、ここ度関西文化圏賞特別賞を受賞した。

京都国立博物館学芸部工芸室研究員兼連携協力室の降矢哲男さんは、博物館の展覧会の成功は「開催までの流れや活動」で決まると明かした。

▽「三顧の礼」なら必「数顧の礼」

展覧会開催は、作品所有者へ展覧会開催のための貸し出し依頼をすることから始まる。次に作品の調査を行い、実際に見て、触り、写真を撮り、輸送方法などを考える。しかしながら、博物館への貸し出しの承諾を得られないことによっても、交渉を続ける。すぐに承諾を得られたとしても、貸し出し依頼、調査、拝借、返却など最低でも四回は所持者の元へ赴く。平泉の中尊寺に作品の拝借をお願いした際には、貸し出し依頼が四回と、調査、拝借、返却の合わせて七回も打ち合わせに行ったそうだ。一点の出品でも、殊の外苦労の絶えない仕事である。

そもそも博物館は文化財を守ることを目的としている。文化財の保護において、一般の人々の心に文化財の素晴らしさを伝えることが重要になってくる。作品を見て、作品を人々の心に残すことによって、人々に「文化財を守っていかなければならない」と感じてもらいたいのだという。

▽展覧会に込める思い

昨年開催された国宝展は、東京の来場者数六〇万人を押え、京都国立博物館は六十二万人という快挙を成し遂げた。また、日本の美術工芸品の約四分の一が集まったこの国宝展は、国内外から大きな注目を集め、京都国立博物館の長い歴史においても過去最高の来場者数となった。開館一二一年目を迎えた平成三〇年も、「豪商の蔵」「雛まつりと人形」など、注目の展覧会が目押しだ。その他近々、今まで一堂に会する機会のなかった展覧会の開催が発表されたりと、この機会に文化財の素晴らしさに触れて様々な気づきを得てほしい、というのが降矢さんの願いだ。

史上初の七冠棋士

二〇一七年、将棋界では藤井聡太五段という中学生の超新星が現れた。囲碁界にも新たな記録を更新し続けている棋士がいる。井山裕太棋士は、父親が買ってきたテレビゲームで囲碁に興味を持ち、五歳で囲碁を始めた。その後、中学一年生の時にプロ入りし、二〇〇五年に史上最年少の十六歳四ヶ月で全棋士出場の棋戦で優勝、二〇〇九年には史上最年少の二十歳四ヶ月で名位を獲得するなど、様々な最年少記録を塗りかえてきた。そして二〇一七年十月、囲碁名人戦七番勝負を制し、囲碁界・将棋界で史上初の七冠（棋聖・名人・本因坊・王座・天元・碁聖・十段）の独占を達成するという偉業を成し遂げた。また、今年、国民栄誉賞の受賞が決まっている。

▽オン・オフの切り替え

囲碁と言えば「長丁場の対局」というイメージがある。長時間集中力を保つ秘訣は、オン・オフの切り替えをすることだと言う井山棋士。切り替えを上手くすることで、二日間かかるような対局も乗り切ってきた。緊張はないのかと問いには、「自分のやるべきことをやるだけだからあまり緊張はしない。慣れというのもあります。」とにっこり。

二十八歳という若さでプロ十五年目という井山棋士。囲碁の名人たる者、数々の対局を旨然記憶しているのだろうとみなされがちだが、特に記憶しているわけではないという。「ただ、自分の中でストーリーを描いているので、思っていたところに来てくれないとやりにくい。」名人でもやりにくい対局はあるのだ。どんな対局でも井山棋士は持ち前の力強い棋風で勝ち抜いていく。今後のより一層の活躍に期待だ。

世界に誇る大阪の文楽

今回「特別賞」を受賞した六代目竹本織太夫さんは、八歳の時に豊竹咲太夫さんに入門し三十五年目となる今年の一月に、豊竹咲南太夫改め「竹本織太夫」を襲名された。現在放送されているNHKの「にほんごであそぼ」にも出演されている。

▽文楽三〇〇年の歴史

「文楽」というものは太夫・三味線・人形が一体となった芸能である。その歴史は江戸時代にまでさかのぼり、町人たち、特に十代の女子に大流行した。二週間ほどの旬な出来事を一つの舞台にしており、『曽根崎心中』を初めとする・心中もの・が特に流行していた。主人公とヒロインに対する憧れから実際に心中する人が多く出てしまい、幕府が取り締まるほどだったそうだ。

▽人形に命を吹き込む

文楽では一体の人形を、首と右手を操る「主遣い」、左手を操る「左遣い」、足を操る「足遣い」に分かれて動かす「三人遣い」が原則である。この三人が揃わないと人形は生きているように見えなくなる。そしてその人形に合わせる語り手である太夫もとても重要な役割である。

太夫は登場人物の台詞だけでなく、その時代の背景や情相も一人で語るという。その語りは、「義太夫節」と呼ばれる独特のアクセントを付けた話し方で、一時間も続けて語ることもあるそうだ。人形と太夫、そして三味線の全てが揃わないと成り立たないものなので、息を合わせて演じるのは大変ではないかと尋ねたところ、「意図的に息を合わせようとしているのではなく、感情を人形に吹き込むことによって自然と合っていく。」ときっぱり。そのため、一回の公演での稽古は、約十五回程は本番と同じように通し、何度も確認しながら一つの作品を作り上げていくそうだ。

「江戸時代の話を日本人が日本語で話すだけなので難しいものではない。世界最高峰の人形劇が大阪にあるということを伝えていきたい。」と仰った。二〇〇三年にユネスコの「世界無形遺産」に登録され、日本国内だけでなく世界中から注目されている文楽。私たちの先祖が楽しんだものを、時代を経て同じように私たちも楽しめるのはそのような情熱によって成り立っている。

竹本織太夫さんと北村陽さん

コラム

文化庁～移転と広がる活動～

文化庁の山口壮八さん

二〇二一年を目処に、文化庁が京都に拠点を移す。この移転は、「都心への一極集中への懸念によるものだ。元来、日本には東だけでなく、日本中に大きな文化の力があった。明治以前、特に江戸時代、大阪は、天下の台所、と呼ばれ、商業が発達し、さらに娯楽の文化が発達した。現在も文楽や『お笑い』の文化など、独自の文化が根付いている。全国各地のさまざまな文化を永久へと繋いでいくために、文化庁は移転を機に新しく生まれ変わろうとしているのだ。

▽「暮らしの文化」

今回の賞の主催機関である文化庁の山口壮八さんにお話を伺った。山口さんは現在、地域文化創生本部事務局で「暮らしの文化」を担当されている。暮らしの文化、とは芸術や食文化など生活に関わるすべての文化を指す。たとえば、食文化と言っても和食だけを指すのではない。フランス料理、中華料理も食文化の一部だ。また食事の作法や「いただきます」などの言葉も同様である。山口さんは「文化は私たちの生活、行動のすべてに関わっていて、切り離せないものだ。」とおっしゃる。これまであまり注目されてこなかった暮らしの文化を保護するために、文化庁は動き出した。これらの文化は幅が広く、現在はまだジャンルの分析の段階なのだ。

また、現在、文化庁は文化財の保護だけでなく、観光への活用にも目が向けている。高尚な文化から身近な文化へ、文化財の保護から活用へ、文化庁の活動はますます広がっていく。

「自分らしさ」を奏でるチェリストへ

登美丘高等学校ダンス部の皆さん

目覚ましい活躍を見せている中学一年生がいる。北村陽さんは四歳でチェロを始め、十三歳という若さで世界トップレベルの「若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクール」で見事優勝。その他たくさんのコンクールで高く評価され、テレビでも多く取り上げられており、素敵な音色で聴き手を魅了している。

チェリストを目指したきっかけはディズニー映画『ファンタジア』だった。サウンドトラックでアダットに魅了されたが、子供用のかさなサイズが無く諦めた。その後、ファミリーコンサートでコントラバスと出会ったが、こちらも子供用がなく諦めかけていた。その時に見つけたのが、コントラバスと同じ形でプチサイズの同じ音域のチェロだった。しかし、こちらも同様に小さなサイズがなかった。チェロの大きさや弾き方の感覚を掴むため、段ボールでチェロの型を取って、弦無しの状態で練習したそうだ。

ドッジボールや野球が好きだったが、週三十時間もの練習のため、最近は遊ぶ余裕もなくなってきたそうだ。練習は精神的にも身体的にも辛いものではあるが、音楽を楽しむことで乗り切ってきたという。

「音楽とは音を楽しむと書くように、心の中で感じたものを大切にすることを心がけている。」とコンプリオ（con brio　生き生きと）で応答。普通の音ではなく、自分にしかない音を奏でて世界中の人々を幸せにしたいという夢を叶えるべく、これからも頑張って欲しい。

魅せる登美丘高等学校ダンス部

近年、全国各地に爆発的な広がりを見せるダンスブーム。老若男女問わず、様々なジャンルで活躍するダンサー達が多数存在する。

その中でも昨年、特に多くの注目を集めた登美丘高等学校ダンス部が、今回、将来性が期待できる人に贈呈される「ニューパワー賞」を受賞した。彼女たちといえば、「バブル」をテーマとしたダンスパフォーマンスだ。キレのある動きと一九八〇年代を連想させるヘアメイクと衣装による衝撃のパフォーマンスは関西圏だけでなく日本中で話題となり、音楽番組への出演も多数見られた。

「バブリーダンス」に限らず、登美丘高等学校ダンス部の特徴は、構成が複雑で全体として動きが揃っていることにあるという。そんなパフォーマンスをこなすためには、ひとりひとりが指先の動きにまで力を入れて、なおかつ全体的な調和を意識する、ということが欠かせないそうだ。

▽支えられてこその自分たち

彼女たちのダンスが世間に知られる大きなきっかけとなったのは夏の全国高等学校ダンス部選手権で優勝、日本高校ダンス部選手権で準優勝を果たしたことだった。高校三年生の部長の林さんには、これからのダンス部を担う後輩達へ、ある想いがある。

「去年果たせなかった日本高校ダンス部選手権で優勝してほしいのはもちろんなのですが、それにとらわれすぎることなく登美丘らしいパフォーマンスを続けて欲しいです。常に周囲の人たちに支えられてこその部活動であることを忘れることなく、日々の練習に励んで欲しいです。」と語る彼女の眼は真剣そのものだった。

これからも「登美丘らしさ」を追求して行く彼女たちの活躍に注目が集まりそうだ。

「文化」で未来を築く

今回の「関西元気文化圏賞贈呈式」に高校生記者として参加させていただき、各分野の受賞者の方々にたくさんのお話を伺うことができたことは、とても有意義な経験だった。彼らのそれぞれの競技や芸能に対する熱い思い、輝かしい功績に至るまでの努力、そしてこれからのビジョンについて語る「生」の声を聞くことによって、受賞者たち全員の活き活きとした様子を肌身で感じることができた。今までにない緊張感と充実感を味わった。取材の後、文化庁の山口さんに文化庁や文化という概念について話していただいた。その中でも鉛筆や手帳、ペンなどはすべて文化だという言葉が特に印象深い。格式の高い伝統芸能や音楽だけが文化なのではなく、日用品や文房具などの身近なものも様々な文化が織り込まれて形づくられている。

スポーツや娯楽、芸能、音楽など多彩な文化に目を向けて日本を元気にしようという活動の一環である式典。様々な文化を発掘し、称え、そして世の中に発信するという活動は今後も日本の文化的発展のために大きな役割を果たし続けることだろう。

大賞	桐生 祥秀(陸上選手)
特別賞	井山 裕太(囲碁棋士)
	京都国立博物館
ニューパワー賞	大阪府登美丘高等学校ダンス部
	北村 陽(チェロ奏者)
	竹本織太夫(豊竹咲南太夫改め)(文楽太夫)